

## 大通公園を望む窓辺から

### 夕暮れ、暗い医局から ～敗戦の日を思う。

常任理事 岡部 實裕

ある日の夕暮れ、職員から声をかけられた。「医局、電気点けていないので真っ暗ですよ」「山の中だからね。なにせ、病院の5階はテレビ塔の高さだから。でも、点けなくて、いいよ。当直医が来るまで」

（マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや）と、声を内に留めて、寺山修二さんの詩を暗唱した。ひと呼吸おく時の私の流儀だが、この場面では、寺山さんの重い詩に失礼だったかな。それに、ここは海辺ではないし、全館禁煙だ。

「貧乏性なんだね」

ふと浮かんだ。「播州平野」(宮本百合子)の書出し、日本降伏の発表があった日の夕暮れの夫婦の「電燈を点けるかどうか」の会話みたいだな。でも、そのことは口にはせず、会話を打ち切った。寡黙は何にも勝る雄弁であるという。

終戦の日というと、高見順著作の「敗戦日記」(文藝春秋社)を古本屋で見つけた時は小躍りしたものだ。あの終戦の日に直面した庶民は、どう受けとめ、どう行動したのだろうか。8月15日の項を読むと、さりげない軍部批判、穏やかで平静な民衆の雰囲気、鈴木首相が少壮将校に襲われたが命は無事だったという街の噂が一片の興奮の気配もなく記されている。だが、「ビルマはどうなるのだろう。～略～ 私はビルマを愛する。日本がどのような姿になろうと、人類のために、東洋は解放されねばならぬ」という一節を読んだ時、詩集「死の淵より」におさめられている「電車の窓の外は」で感じた彼の真髄を垣間見ることができたような気がした。

「電車の窓の外は/光にみち/喜びにみち/～略～ なのに私は死なねばならぬ/だのにこの世は実にしあわせそうだ/それが私の心を悲しませないで/かえって私の悲しみを慰めてくれる」

私はこの詩の「輝き」を大事にして患者さんに向き合うよう努めてきた。これからも、その気持ちを持ち続けて地域医療の現場で年甲斐もないといわれないように働くとするか。さあ、当直医が来たようだ。電気を点けて、大通公園を望む道医会館での会議へたつとしよう。



### Global化への考察

理事 倉増 秀昭

木々が赤く黄色く色づく初秋の晴れた日、妻と愛犬とともにニセコへとドライブに出掛けた。

20年振りの訪問である。

ニセコへと車を進めると、紅葉に彩られた羊蹄山が私たちを迎えてくれた。その見事な形成とキャンパスに描かれたような色彩は、多忙な日常をおくる私達に、一瞬の間に心地良い穏やかな時を与えてくれた。

ニセコの町へと車を走らせると、20年前のその光景とは様変わりした姿に、驚きを隠せなかった。スキー場近辺には、マンションやビルが複数建ち並び、新しいさまざまな店が開店していた。

マスメディアで、オーストラリアの人々がpowder snowを求めてニセコを訪れ、そして定住していることは承知していたが、近年では、中国を始め多くの東南アジアの人々が、ここを訪れているという。建設されているもしくは、建設中のマンションも、その方々の需要によるものとのこと。

それに加え、この地の清水や土地も、ある外国資本に売買されていることも、報道されている。

スコットランドで、イギリスからの独立の是非を問う住民投票が行われたニュースは記憶に新しいが、そのスコットランドでも、ニセコ同様、多くの土地が同じ外国資本に売買されているという記事を目にした。近年の世界の力関係の変化を物語る状況である。

かつてバブル期の日本も、ニューヨークのビルを買収するなどのビジネスが行われていたが、そこには、相手国を尊重する中での経済手法が存在していたように思う。

Globalな視点で見れば、正当な取引であるだろうが、そこに必ず人道としての相手国に対する敬意を払うルールが存在してほしいと強く願う。

ニセコの清水とそば粉で仕上げられた蕎麦を堪能し、羊蹄の麓で作られた農産物を購入し、この地の永遠に続く静寂と美しさを願いつつ、ニセコを後にした。